

# 細切れの休暇より長期休暇を

## 6

淑徳大学経営学部 観光経営学科 教授

廻 洋子

日本政府は、観光産業の長年の課題である繁閑の差を解消するため、従前より「観光需要の平準化」を目指してきた。国民の旅行時期の分散化を図った「ハッピーマンデー」と呼ばれる祝日三連休制度や、2009年（平成21年）に続き今年も出現する「シルバーウィーク」と呼ばれる秋の大型連休等、さまざまな施策も実施された。さらに、昨年は公益社団法人日本観光振興協会が「1ウィークバカンス」を提唱したが、効果のほどは今一つに見える。また、厚生労働省は、昨年から企業に対して社員の年次有給休暇5日間の消化を義務づける案を検討している。

しかしながら、このような細切れの休暇を積み重ねても、ピーク日が増えるだけで、需要の平準化をもたらすとは言い難い。多くの国民が旅に出るのは、週末を除くと相変わらずゴールデンウィーク、お盆、シルバーウィーク、年末年始である。フランス人の知人は「日本人は混雑の中に練り出し、ショッピングに観光にと忙しく、ゆっくり過ぎ（そうとはしない）と皮肉っていた。つまり、料金が高く混雑しているピーク時期に細切れの休暇を取っても、肉体と精神を再生するための「本質的な休み」を享受することはできないというのである。

観光需要の平準化には、連休創出

というような小手先の施策ではなく、本格的な長期休暇の普及が必要ではないのか。長期休暇・バカンス先進国であるフランスでも7～8月はバカンス時期のピークであるが、日本のピークはゴールデンウィーク、お盆、年末年始の3～4日というポイントなのである。長期休暇制度が普及すれば、日レベルのピークをせめて月レベルのピークに置き換えることができる。

そこで、本稿では、フランス人のバカンスの歴史と現状、そして日本人の休暇意識を考察しつつ、長期休暇の意義を考えてみたい。

## 余暇に対する 欧州人の価値観

「長い余暇」を意味するバカンスは、比較的新しい概念であり、労働者階級まで含めたバカンスが国民行事のような形になったのは20世紀に入ってからである。しかし、バカンスの上位概念である余暇 (Leisure) に関する思想は、欧州において、古代ギリシャから連綿と続いている。

欧州人と日本人では余暇と労働に対する価値観はかなり違うようである。日本人は勤勉を是とする。その精神は現代にも受け継がれており、長時間労働の習慣はその名残である。「小人閑居して不善をなす」……凡人は暇にしておくより働くことはないのだから働くべし、という考え方もある。Leisureの訳である余暇という日本語は余った暇と書き、余りもの扱いだである。

一方、プロテスタントは異なるが、一般的にカトリックの欧州人は、仕事をするために人生があるのでなく、仕事は人生の一部であるとし、余暇 (Leisure) に重きを置く。そもそも



19世紀末の富裕層のリゾート、フランス・ドーヴィル。1913年、ココ・シャネルは当地にモード・ブティック第1号店を開業

(JTB Photo)

古代ギリシャでは労働は奴隷がするもので、生存のために必要に迫られて行われる物質的な諸活動であり、不自由で卑しい活動と見なされていた。高貴で自由な人々は暇のあることが誇りであり、真実を追求する哲学、美の追求、人々との交流、議論や政治といった人間的で価値の高い活動に暇を費やすのであるから、余暇は精神性の高いものである、というわけである。

20世紀に入っても余暇に対する考え方の根本は大きく変わっていない。フランスの社会学者ジョフレ・デュマズデイエ（1915～2002）は、著書『余暇文明へ向かって』の中で、レジャーを「個人が職場や家庭、社会から課せられた義務から解放された時に、休息あるいは気晴らし、あるいは利得とは無関係な知識や能力の養成、自発的な社会的参加、自由な創造力を発揮するために、全く随意に行う活動の総体」と定義している。『利得とは無関係』というところがポイントであり、余暇こそが人間としての資質を高める時間という考え方である。

## イギリス人の 貴族がもたらした リゾート地滞在

このような余暇の思想が底流にある欧州では、バカンスが発展する素地があったことが推測される。

バカンスと言えば、フランスを想起するが、最初に観光・リゾート地滞在の慣習を広めたのはイギリスの貴族であった。18世紀の初頭、彼らの間に、英国の南部の海岸で過ごす慣習が芽生え、海辺のリゾート地が誕生した。その後、フランスの海辺へと足を延ばしている。

フランスのリゾート地は、18世紀初頭はパリから近いノルマンディ地方に開発されたが、ニースに鉄道が開通すると外国人貴族に人気のリゾート地となった。寒村だった南仏のカンヌもイギリス貴族の屋敷が次々と建設され、まずは寒いイギリスの冬を避けて、避寒地としての南仏で10月から4月くらいまで過ごした。この慣習は大陸諸国にも波及し、フランスの上流階級もイギリス貴族を見習い、パリを離れてまとまった期間

をリゾートで過ごすようになった。

レジャーを楽しむ階級は、資産があり、生産的労働を行わず、暇な時間を非生産的消費に費やす、いわゆる一握りの有閑階級だけであったが、20世紀に入ると、徐々にその慣習は新興ブルジョア層、アッパーミドル層にまで広がっていき、リゾートは社交の場となっていった。ブルジョア層にとってはリゾートで長期間滞在することは、ステータスシンボルとなった。

「貧乏暇なし」の労働者階級、大衆にとつて無縁と思われたこの慣習を労働者階級に浸透させたのは、レオン・ブルム首相率いる人民戦線内閣である。1936年に同内閣が、年2週間の有給休暇を制度として取り入れたことはよく知られている。労働者にとつて有給休暇取得は権利となり、企業にとつて休暇付与は義務となった。

当初は労働者も突然与えられた有給休暇に戸惑ったといわれるが、バカンスを楽しむ慣習が大衆レベルに浸透していった。富裕層の人々だけがバカンスを楽しんでいた南仏に、

多くの労働者が押し寄せてきたことに、彼らは眉をひそめたという。

現在では5週間の有給休暇が定められており、しかも、休暇の一部は最低連続した12日労働日でなくてはならず、24日を超えることはできないとされている。今日では2000年に導入されたオプリアと呼ばれる労働時間短縮制度に基づく時間短縮分の代替休日加わるので、一層長い休みを取ることが可能である。

## 空っぽに休む

フランス語のVacancesという言葉は、「空虚」「空の」あるいは「2つの物の間」という意味の、vacuum、vacareというラテン語からきており、元来は法廷が休止する時間を指していたという。すなわちバカンスは「仕事を中断し、空にして休息する」という概念なのである。11カ月働き、1カ月は労働を中断し、別の人生を過ごすことよって、より創造的に仕事に取り組むことができ、より集中もできるという考え方である。

ピカピカに磨いた靴、  
糊のりのきいたワイシャツ  
新聞、テレビ、ラジオ、  
そして日常生活よ、  
みんな Good bye!  
全てを忘れて、2週間別人になる。

汽車に乗って、船に乗って、  
遠くに出かけていこう。  
自分自身を取り戻すため、  
いつもと全く違う場所に旅立とう。

太陽、海、風を肌で感じながら、  
笑いや歌声とともに  
本当の人生を生きるために！

(ジルベール・トリガノ)  
前述の文章は、筆者が2002年までの23年間勤務していたフランスのバカンス企業・地中海クラブの創始者の言葉である。トリガノ氏は「大切なことは、金持ちになることではなく、金持ちのように過ごすこと」と断じ、上流階級のバカンスの楽しみ方を加工し、一般市民に提供し、「バカンスの伝道師」と称された。



「空っぽにして休む」フランス・ニースの海岸 (JTB Photo)

フランスの本社では、復活祭が終わると、マネージャーは自分の担当する部署のスタッフの夏休みの調整を始める。当時は有給休暇25日であったが、多くのフランス人社員は夏には3〜4週間のバカンスを楽しんでいた。本社の担当者調整が必要なら、前もってバカンスの時期をチェックしておかないと、待ちぼうけを食わされ仕事が進まないことになる。

1年は夏のバカンスを中心に回っており、フランスでは6月になると「今年のバカンスはどちらへ」、9月

になると「今年のバカンスはどうでしたか？」が挨拶代わりとなる。このような話を聞くと、フランス人は休んではかりいて、働かないと見なされがちであるが、フランス人の職者は、労働時間に関わりなくよく働く。仕事は大切だが、人生は仕事をするためだけにあるのではない、よく働くからこそ充電期間であるバカンスが必要なのであるとし、オンとオフのスイッチを切り替えている。要は仕事とバカンスは対立する概念ではなく、補完し合う存在なのである。フランス政府の統計によれば、フランスの人口の75%が1泊以上の旅行に出かけており、1〜3泊の短期旅行に出かけた人は人口の50.8%、4泊以上の長期旅行・バカンスへは65.8%で、それぞれの滞在日数の平均は短期が1.8泊、長期が10泊である。10泊のバカンスは思ったより短く感じられるが、これはあくまで平均である。1人が1年に取得したバカンスの回数は2.7回であり（短期旅行は3.6回）、バカンスを夏冬、イースターと分散して取るためであると推測できる。もちろん、地

域によって学校の夏休みの開始時期をずらすなどの対策も行われている。行き先は国内が75%、外国が25%で圧倒的に国内が多く、時期は7、8月に集中している。国内の宿泊先の7割は、セカンドハウス、親戚の家、友人宅などであり、ホテル、貸別荘、キャンピングなど商業ベースの宿泊先は3割程度である。

## 日常と異なる環境で過ごす日常生活

フランス人のバカンスの過ごし方は、忙しく動き回る周遊旅行ではなく、海辺や田舎等に滞在するスタイルが一般的である。バカンスに出かける第一の目的は、休養と気分転換によるリフレッシュである。バカンス先では、日常生活と異なった環境の中で、プライベートな時間と空間に浸った「生活」を楽しむのである。

バカンスは、「みんな忘れて別人になる」ため、仕事と無関係のコミュニティでの出会いと交流の機会である。仕事が多忙なため、日頃ゆっくり話

せない家族との触れ合いにより、自分の息子はスポーツが得意なことを発見したり、大人びてきた娘にかすかな驚きを感じたりする機会になる。日本では家族旅行というと親子がいつも一緒にいるイメージであるが、フランスは大人が中心の社会であり、子どもはバカンス地で新しい友達を見つけて、一緒に遊ぶ場合が多い。大人は、大人同士で他のバカンス客や地域の人々との出会いや社交を楽しむ。一昔前のフランス映画やフランスの小説には、バカンス地における出会いや交流が描かれている場合が多い。そして、8月末には別の人生を過ごしたバカンスも終わり、充電を終えて、新しい年度を迎える。人々はまた日常生活に戻り、次の「空白」を心待ちにする。

## 日本人の旅行とバカンス

日本人は旅行好きな国民として知られてきた。

江戸時代には参詣に名を借りた旅行が大いに流行り、人々は道中の観

光を楽しんだ。現在の観光は、主に神社仏閣などの名所旧跡を巡り、景色を楽しみ、温泉に入り、土産を買うという要素から成り立っているが、江戸時代にすでにこの原型は成立しており、今日に引き継がれている。しかしながら、日本人の旅は大衆の物見遊山型だけでなく、一部の知的階級に限られているものの、内省的な存在でもあった。

旅をすることにより日常生活から脱し、旅をする過程を通して自己と向き合う。諸国を巡り多くの和歌を詠んだ西行、彼に憧れて旅に出て紀行文を著した俳聖・松尾芭蕉から、70年代の若者を世界の旅に駆り立てた旅行記『深夜特急』の沢木耕太郎に至るまで、旅をする漂泊の過程で、自己を追求し続けてきた。哲学者三木清は、その著作『哲学ノート』で「平生の実践的生活から抜け出して純粹に観想的になり得るということが旅の特色である。旅が人生に対して有する意義もそこから考えることができる」と述べている。

「バカンス」は物見遊山型・周遊型の旅とも、内省的な漂泊的な旅とも

異なっている。バカンスは観光資源を訪れるのではなく、仕事を中断し、別の人生を過ごすため、日常生活とは異なる空間で、日々を家族やバカンス仲間、地元の人々との交流に費やすことである。それでは日本人にはバカンスはフィットしないかということでもない。

バカンスに最も近い一般的な日本人の旅は、昭和30年代までの「帰省の旅」ではないだろうか。地方から都会に出てきて就職した人たちの多くは、お盆になると家族を連れて故郷に帰った。子どもの頃過ごした



「帰省の旅」子どもたちと自然に親しむ

(JTB Photo)

地域コミュニティで本来の自分に戻り、家族や近所の人々、そして幼なじみとの再会や交流を楽しんだ。故郷にはまだ豊かな田園風景が残っていて、都会育ちの子どもたちは自然と親しんだ。日常と異なる空間と時間を享受する「生活」、これこそバカンスであった。

## バカンス客から見た 魅力的な滞在先の 創出

前述したように、フランスにおけるバカンス（長期休暇）は余暇文化へと昇華しており、人々の精神に根付いているものである。日本での長期休暇の普及推進には、もちろん日本人の休暇取得に対する意識を高めることが必要だが、休むことを潔しとしない風潮が今も続く日本では、意識改革までもっていくことはなかなか難しく、安価に長期滞在できる施設も少ない。

となれば、重要なのは、旅行スタイルや滞在先の選択肢の幅を広げる提案、すなわち旅行者やバカンス客

から見た魅力的なバカンスの形の創出ではないか。

例えば、「帰省の旅」も、今日では都会に住み始めて2代目、3代目となると、田園風景の豊かな田舎に実家があつて帰省できる人は限られる。帰省先のない人々に、一時的な故郷や日常と異なるコミュニティでの滞在を提供してはどうだろう。

東京人が7〜8月に全て2週間の長期休暇を取得し、東京の街を地方の人々や外国人に明け渡して、豊かな自然のある地方に滞在することになれば、地方創生に寄与し、東京人は地方の自然を楽しみ、文化を学ぶことができるだろう。人口減少の進む地方には活用できる空き家が多いあるのではないか。

観光地ではないバカンス（長期休暇）滞在先の発掘により、今までにない旅行スタイルを創出することは、旅行時期の分散化ではない観光需要の平準化を生み出していくに違いない。

（めぐり ようこ）

### 【参考文献】

- ・飯田芳也「フランスバカンス制度についての一考察―日本での長期休暇普及のために何を学ぶか」(城西国際大学紀要16(6)、pp.15-32、2008年)
- ・瀬沼克彰『西洋余暇思想史』(世界思想社、2008年)
- ・鈴木宏昌「フランスのバカンスと年次有給休暇」(日本労働研究雑誌NO.625(8)、pp.45-54、2012年)
- ・Chiffres des du Tourisme, Etudes Economiques, 2014 Direction Generale des Entreprises.



### 廻洋子（めぐり ようこ）

1980年クラブメッド（地中海クラブ）日本法人入社、広報室長、マーケティング部長を歴任。2002年淑徳大学講師、同大学国際コミュニケーション学部教授を経て、現在、同大学経営学部観光経営学科教授、国土交通省運輸審議会委員、交通政策審議会委員等を歴任。